

高梁の文化財⑥

重要文化財 保月の六面石幢と板碑

〈中世の祈りの造形〉

鎌倉時代の末ごろ、大和西大寺(真言律宗)に属して活躍した石大工、井野行恒が有漢を訪れ、花崗岩を使ったみごとな石造物を数多く製作しました。その代表作が六面石幢と板碑で、有漢町上有漢大石地区の保月にあります。これらは、中世という時代を特色づける独特の形式を備えた貴重な石造物として、昭



金光寺跡に立つ六面石幢

和三六年(一九六二)、一括して国の重要文化財に指定されました。

高さ二六四センチを測る六面石幢は、六角形をした石柱のうえに六角形の笠石をのせた優美な石塔で、西信・西阿を願主として嘉元四年(一三〇六)に造立されました。石柱の各面に彫られた十二の仏像は、初七日から十三年忌の供養を表しており、平安時代の十王信仰から室町時代の十三仏信仰への過渡期にあたる資料として注目されています。

六面石幢から一五〇センチほど離れた道路脇に立っている板碑は、高さ三二四センチ、幅四三センチもある大きなもので、三角形に整えた先端の下を一段低く加工し、釈迦・阿弥陀・地藏の三尊仏と、西信と同一人物と見られる漆真時以下二八人の人々が嘉元三年に造立した銘文を刻んでいます。さて、この二つの石造物を手掛けた井野行恒は、中国からやってきた工匠を祖とする大和西大寺の技術者で、花崗岩とい



山門のようにそびえる板碑

う硬い石材を加工する高度なわざを身につけていました。その行恒がこの地を訪れたのは、西大寺の末寺である金光寺のもとに漆真時のような有力な信徒が存在したこと、また西大寺が社会事業として進める各種の土木工事に欠かせないすぐれた鉄製の道具を供給していたことなどが考えられます。行恒が西日本各地に残した石造物は、新仏教に対抗して宗勢の拡大を図る真言律宗教団の布教活動を物語るものでもあったのです。

造立されてから七〇〇年余り、深い信仰と祈りをこめて造られたこの二つの仏塔は、時の経過を感じさせない迫力と輝きを見るものに伝えています。

(文・市文化財保護審議会副会長 秋葉 将さん)

編集と発行(毎月15日発行) 高梁市総務部企画課

〒716-8501 岡山県高梁市松原通2043 電話0866(21)0210 ホームページアドレス <http://www.city.takahashi.okayama.jp/>



この印刷の一部には水質保全に有効な水なし印刷方式を採用しています。



環境にやさしい大豆油インキを使用しています。



古紙パルプ配合率100%再生紙を使用しています。